

# 『哲学の探求』第二十六号刊行にあたって

ここに上梓するのは、第二十六回全国若手哲学研究者ゼミナール（通称「若手ゼミ」）においてなされた研究報告、および発表の集大成である。研究会は本年の七月十一日・十二日に、箱根の湯河原で開催された。参加者が例年よりも若干少なかったのは残念であったが、まず一日目の夕食後、死刑制度の是非をめぐってのディスカッションは公表を博した。その翌日、毎年の呼び物ともなっているシンポジウムでは、「身体」の問題が論じられることになっていった。いまの我が国においては、もろもろの社会問題が、若い世代に特有の身体感覚と結びつけられて議論されることが多い。だが、これまで一般に身体というものは、あまりに自明な日常的現象とされ、考究の中心に据えられることが稀だったのであるか。そこで企画者は今回、問題領域の浅い表層には現れないような、身体論のもつ豊かなアスペクトを示すことができれば……と考えたわけである。さて当日の報告においては、問題の暗部を鋭くついて批判するというよりも、むしろ身体のポジティブな可能性を示そうという、前向きな提言が行われた。また討議の部では、中身の濃い問題提起が多いように見受けられた。個人研究発表の際にも各々、大いに活発な議論が交わされたことはいうまでもない。

「若手ゼミ」とは、哲学思想や社会学を専攻する若手の研究者たちが集まり、自由の風を尊び権威主義を廃し、あくまで自主的に運営する会であり、交流や発表の場を広く提供することを目的としている（マンネリズムに陥るのを防ぐため、次期に開催するか否かは、その回ごとに参加者全員の意思で決定する）。そして他の多くの学会の場合とは異なり若手ゼミでは、どの参加者とも自由に気がねなく、かつ対等の立場で議論することができる。この活動は、ともすれば生活世界との生き生きとした連関を見失い、視野の狭い文献学的な研究に走りがちな傾向へのプロテストでもあるだろう。

今後、このような有意義な活動の輪が、ますます広がってゆくことを心から願ってやまない。

一九九八年冬

第二十六回全国若手哲学研究者ゼミナール世話人一同